

FOR ADULT ONLY



お全滅！

お全滅に
ございま
する！

○ごあいさつ○

初めての方ははしめましてでもいいし
そうでないかたはこんにちはでもいい

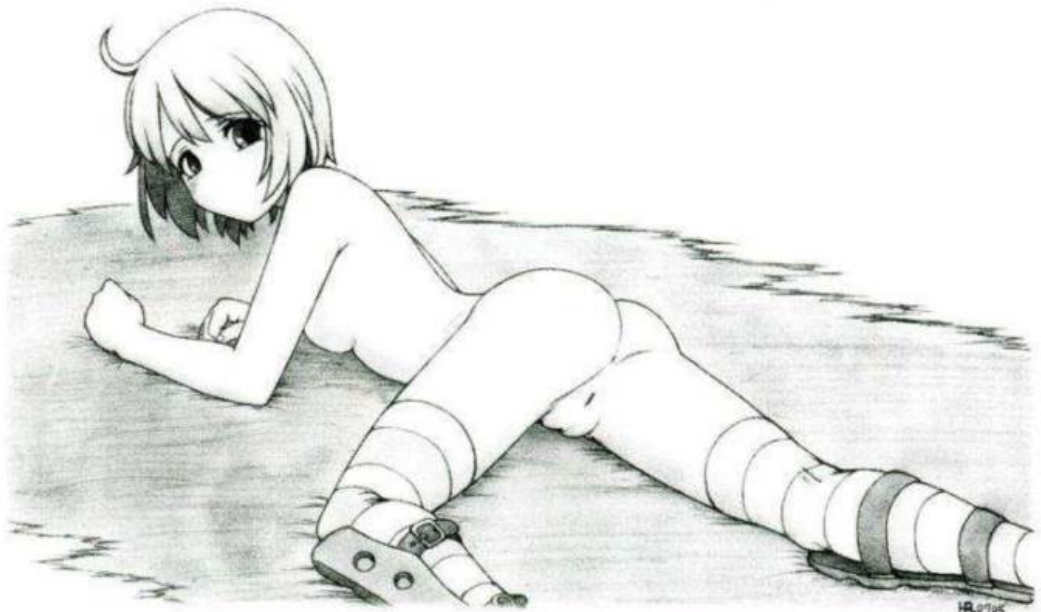
この本を手にとってくださった方は、とりあえず
14に進んどけありがとうございます
どうも いっしたいいらです

今回はいつか出したいと思っていた DS の名作は
「世界樹の迷宮」本でございます
勢いで異種姦オノリ 18禁になっただけでは飽き足らず
ゲストまでお願いしてしまいました
「世界樹ならエロかくよ」と快く参加してくださった
ゲストの皆様には、この場を借りてお礼申し上げます

それではどうぞ、ご覧くださいたまえ 日本語おかしい

index 敬称略

- P5 漫画 いっしたいいら
- P17 イラスト 松乃かねる 独訳オバドス
- P18 小説「例えばこんな全滅劇」 assau t
- P27 イラスト ベンシャミン くれじつと
- P28 漫画「蜘蛛の糸」 月咬 月咬洞
- P36 小説「緑蝕」 内田弘樹 近衛衆兵鉄虎第501大隊
- P45 漫画「シカ商店繁盛記～商品ができるまで」 龍樹悠太 /SYSTEMBAS C



カット 電腦無能

彼らは
進んだか

いや・何も
言わなくていい
ツスクル

全力で挑んでなお
私達は負けたのだ

レン

どちらにせよ
あとはもう
彼らと
ヴィズルの間で
事は成される
だろう

私達の役目は
終わったのだ

いや

終わっては
いない



な

まさか
ヴィズ

!



6



う
あ



終わ
フセは

シナイ





う



こは

世界樹の
中枢か



ツスクル

か



うあ

は

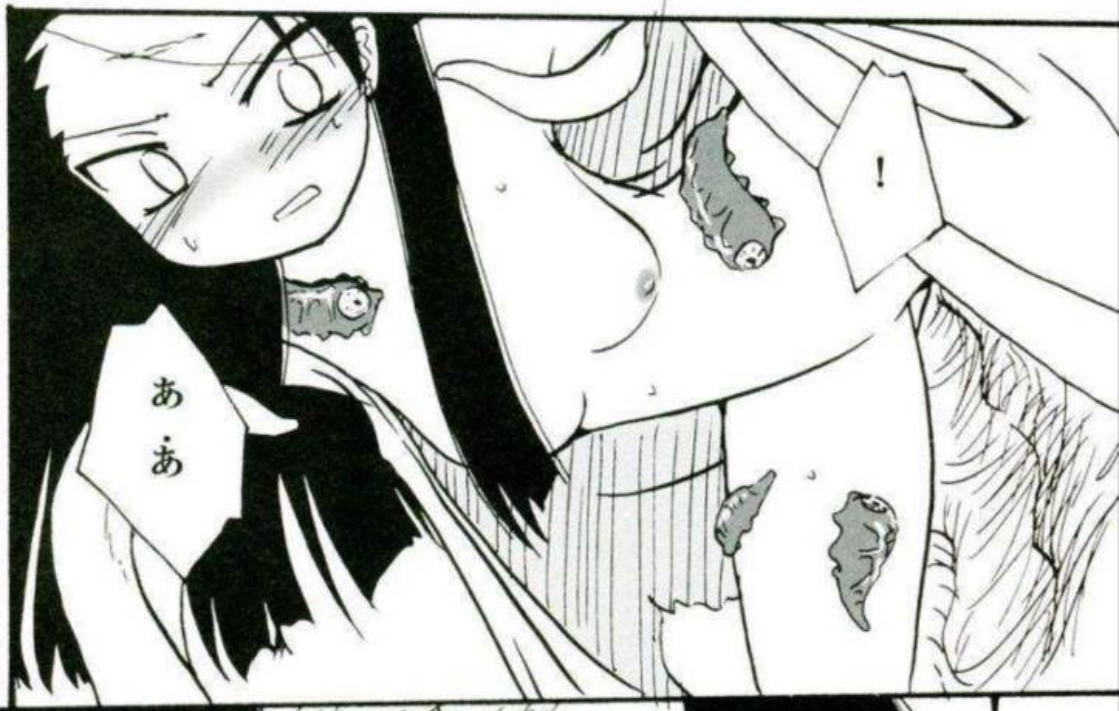
ひ

し

ん



っく





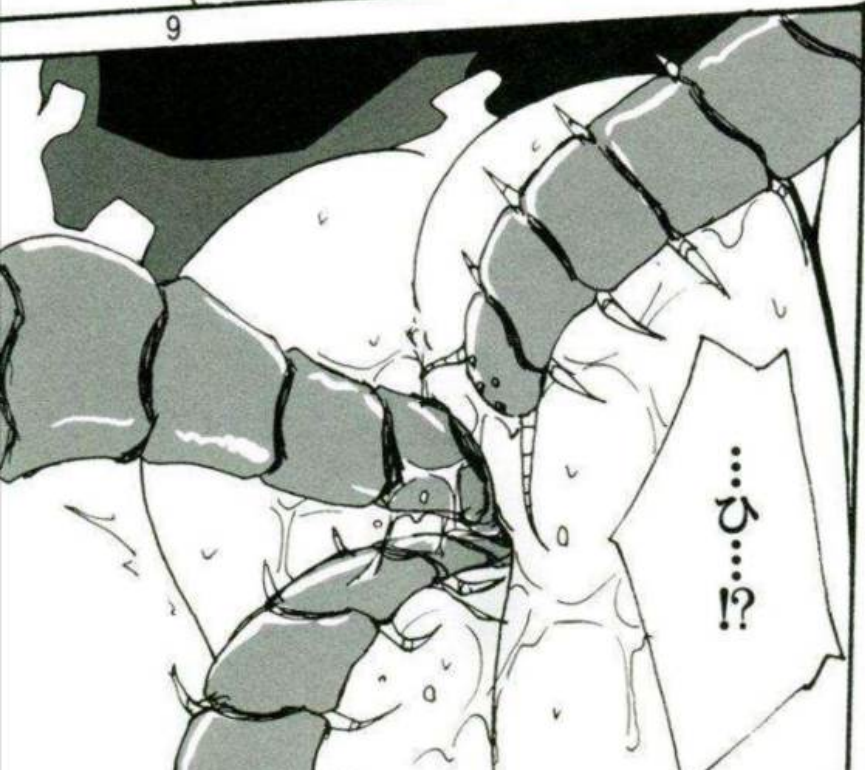
かは

あ、

ふあ



うあは、



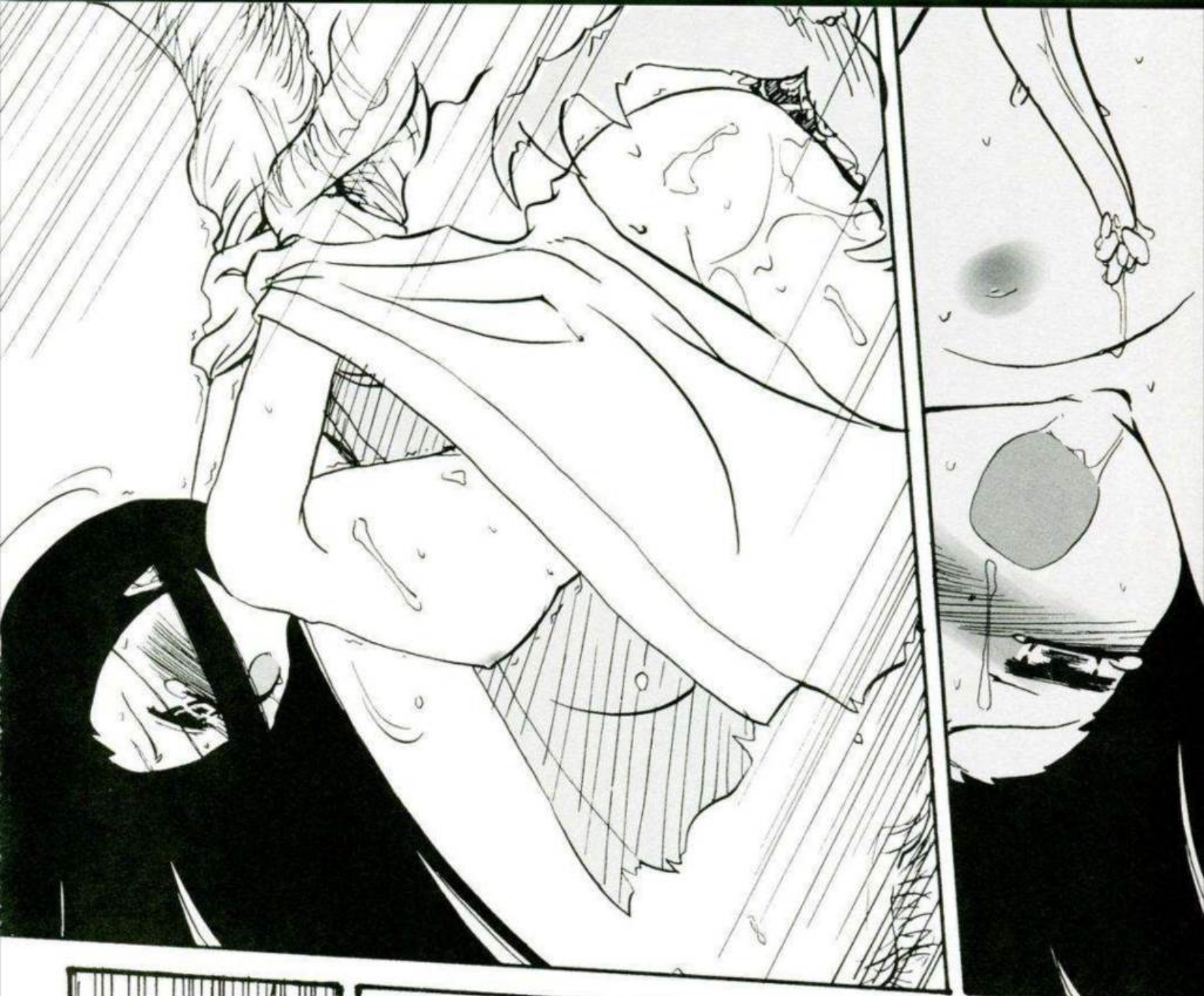
…ひ…!?



つう











君たちは

そのまま
世界樹の礎ト
なれたマエ



そウだ
全テ
抹殺すレ

ああ
そうか

世界樹の存在を
脅かすものは
すベテ――

もう
ヴィズルという
男は この世に
存在しないのか

願わくば

この――呪われし
存在を止めるのが
彼らの手ならんことを



おそろいな服装もどした。マコが苦痛にわめき出した。 桂原かほる

「うーん、やっぱりアリアには荷が重いのかなあ……」

私はその言葉に反論することが出来なかった。私の目の前には、私が所属しているギルドのリーダー、バスネルさんがいる。この人はギルドの初期メンバーの一人で、もうすぐレベルが70になるとか。重い鎧を着込んでいるというのに、戦闘では私よりも機敏に動いている。持ち前の明るさと探求心で迷宮の先駆者と喚ばれている。

「そんなこと言うなんて、バスネルらしくないよ。彼女だって立派なカースメーカーなんだからさ」

陽気な笑みをうかべて割って入ってきたのは、バードのケインさん。

私はこの人が笑顔以外の表情をしていたのを見たことがない。彼の詩は、皆の心を和ませ勇気をくれる。ギルド内でもよく歌っているけれど、私もその声に耳を傾けることは多かった。

「リーダー、スパッと云っちゃいなよ。アリアにカースメーカーは向いてないって」

背後からやってきたのは、剣士のロールさん。

女性なのに、大きな剣を振りかざして敵を惨殺するのが趣味だとか。

勇ましくて格好いいと思う。

「まず、アリアって名前が可愛い過ぎる。とても相手を呪いそうな名前じゃないし。それに、この前だってギルドに残ってたメンバーにお茶汲みしてた。そういう優しいところって、呪いと正反対のどこじゃないの？」

「あ、それは……その……喉が乾いてるかなって思ってた……」

「あーもう、そういうところがらしくないって言ってるの！ そんなので本当に敵を倒せると思ってるの？ 第一、あんたメンバーの中で2番にレベルが高いのよ？ それなのに、なんなんよあのスキルは」

「えっ、そんなに変ですか？ ちゃんと殺気解放もLV10ですし、呪いも恐慌状態にも出来ますし……」

「だからってなんで殺気解放なんかLV10もつぎ込んでるのよ！ それに、寄ってくるのは戦闘する気満々というより、あんたの顔見たさに集まりましたー、みたいなへらへらした敵ばかりだし」

「あ……う……すみません……」

「ああ、もう！ そこで謝らない！ 呪い返す位の気概はないのかー！」

「うう、そう言われても、仲間を呪うなんて私にはとても出来な……」

「だめだこりや……」

一体、何が悪いんだろう。やっぱり、私はこのギルドにはお荷物なかな……。でも、ここまで頑張ってきたのは、少しでもギルドに貢献して一人前のカースメーカーになる為だったのに。

「あ、あの……試験、させてもらえませんか？」

「試験？ なんの試験だい？」

「リーダー、試験って言ったら決まってるだろ。討伐だよ、と・う・ば・つ」

「はい。私に討伐試験を受けさせて下さい。それでダメなら、諦めて故郷に帰ります」

「そう言われてもなあ。一人で討伐の依頼は既に全部こなし……」

ああ、分かった分かった、そんな泣きそうな顔になるなよ。俺が悪人みたいじゃないか。そうだな、金鹿の酒場でクエストを一つ達成してきてくれ。どうせ低レベルの依頼はもうないし、無事に帰ってきたらみんな認めるだろう？」

「パスネルさん……ありがとうございますっ！」

私は思わずパスネルさんの手を掴んでしつかりと握りしめた。私は大きく上下に振ったつもりだったけど、重い小手を身につけたパスネルさんの腕はびくともしなかった。

「じゃあさ、俺も一緒に行くよ。いくら試験と言っても、心細いだろうからさ」

「ま、ケインが行くくらいならいいんじゃない？」

こうして、私とケインさんはたった2人で世界樹の迷宮へと挑むことになった。ケインさんもLVは50を越えている。そんなに深いところに行かなければ、2人でも十分戦える。……そう思っていた。

・・・

「今さら第二階層に来るなんて思わなかったなあ。でも少女の声が聞こえるなんて不思議な依頼だね」

「そうですね。でも、他の冒険者さんがたどり着けないような場所ですから、気をつけないと」

私は目の前に広がる毒の沼に喉を鳴らしながら呟いた。声が聞こえてくるとされている場所はこの毒の沼の向こう、小さく孤立した部屋の中から聞こえてくるらしい。大広間に広がった紫色の湿地は、近くにいないだけでも気分が悪くなってくる。

「どうする？ 彼の依頼を探してみてもいいと思うんだけど」

「いえ、このまま引き下がれません。それにHPが減った方が私には有利ですから」

「ああ、あれか……確かに俺と組む分には強いと思うけどね。もしボスクラスだと思ったら、子守歌を歌うからね」

「はい、お願いします」

ケインさんの歌う詩は、私達に勇気を与えてくれるだけじゃない。活力も与えてくれる。それに、他の人達の一時的効果と違って、戦闘が終わるまで継続してくれる。

「それじゃ、行きます……！」

私とケインさんは、口と鼻を塞いで沼へと走り出した。けれど、ぬかるんだ毒の沼は思ったより私達の足を取り、体力奪っていく。けれど、この程度で倒れてしまうほど、私達も弱くはない。ほどなくして、問題の部屋の前へとたどり着いた。

「女の子のすすり泣きが聞こえてきますね……」

「うん、もしかしたら、女の子が魔物に囚われているのかもしれない。念の為体力を回復して行こう」

私達は手持ちのメディカである程度体力を回復させると、重々しい扉を一気に開いた。

「うっ、ううっ、ぐすっ……」

「あつ、あんなところに女の子が！ 大丈夫ですか！」

私は少女の姿を見た瞬間、思わず前へと飛び出していった。いつもなら後ろで怯えているだけなのに、今日だけは足が前に出ていた。もしかしたら、功を焦っていたのかもしれない。

「アリア、油断するな！ 魔物がいるかもしれないぞ！」

「あら、魔物って言うのは……私のことかしら？」

ギイイイ……バタン！

背後で扉の閉まる音がした。慌てて振り返ると、扉を開けようとしているケインさんの姿があった。ケインさんは何度も扉に体当たりするけれど、扉はビクともしない。

「くっ、畏かつ！ アリア、その子から離れろ！」

スパアアアンツ！

私が飛びずさるのと、大地を叩く高い音が聞こえたのはほぼ同時だった。再び少女の方を向いたそこには、凶悪な笑みを浮かべて私達を見下ろす半裸の少女の姿があった。下半身はツタにまみれてよく見えない。

「まさか……あなた自体が魔物なの？」

「ふふ、その通りよ。こうやって少女のすすり泣きを聞かせれば、愚かな冒険者は必ずやってくる。それを狩って楽しんでるのよ？ さあ、あなた達の悲鳴を聞かせて？」

「やれやれ、とんだクエストになったな。いくぞ、アリア！」

「はいっ！」

ケインさんはすかさず前に出て、私をかばいながら詩を歌い始める。勇猛な蛮族を思わせるその曲は、私の体力を高めてくれる。

「そう、あなたはバードなのね。だったら、少し遊んであげようかしら」

地面を這うツタが獲物を見つけた蛇のように狙いを済まし襲い掛かってくる。それはケインさんをすり抜け、私に向かってきた。

「あぐっ、きやあつ、あうっ、かはっ！」

暗色のローブがツタに引きちぎられ、焼け付く痛みがほとぼしる。呪詛の鎖が耳障りな音を立てた。けれど、私はなんとか立ち上がって呪詛

を放つ。

「死したるあまたの魂達よ、今こそ甦り我が怨敵を縛れ！」

相手に呪詛を打ち込み、呪いを付加させる罪咎の呪言。けれど、これは不発に終わったのか、魔物は笑みを浮かべたままだった。

「へえ、察するところ、あなたが噂のカーズメーカーね。面白い術を使うじゃない。今日はあなたをいたぶることに決めたわ」

「くそっ！ アリア、あいつから出来るだけ距離を取るんだ！」

「でも、この部屋は狭すぎて……あつ、あぐっ！」

再び魔物のツタが私を穿ち、私は思わずその場に膝をついた。こんなことじゃいけない。ここで私が倒れたら、ケインさん一人でこの魔物と戦うことになってしまう。

「アリア、あれを使う！」

ケインさんはそれだけ言うと、心休まる子守歌を歌い始めた。ギルドで聞く詩とは少し違い、聞いているだけで傷の痛みが少しずつ引いていく。

「ふふ、ご苦労様。それを待っていたのよ。それじゃああなたはもう用済みね。さ・よ・な・ら」

「ケインさん！」

突然ケインさんの地面から吹雪が巻き起こり、私が手を伸ばすよりも早くケインさんの身体は宙を舞った。地面に叩き付けられたケインさんは、まだ息があるのか立ち上がろうとした。けれど、身体が痺れているのか小さく手を震わせて苦渋の顔を作った。ケインさんがあんな苦しそうな顔をするのは見たことがない。いつも笑顔だった表情にはもはや余裕はなく、土まみれの額には悔しそうな皺が寄っていた。

「残念だけど男には用はないの」

ツタが槍のように伸び、ケインさんを次々と串刺しにしていく。ケインさんは衣装を真っ赤に染め、やがてそのまま動かなくなった。

「ケインさん、ケインさんっ！」

「今度はあなたの番よ。あなたは簡単には殺さない、たっぷりいたぶつてあげるわ」

「えっ、やっ、離して下さい！ ぐっ、あぐううううっ！」

魔物のツタの攻撃を避けられない私が、今さらツタの拘束から逃れられるはずがなかった。私は胴をツタでぐるぐる巻きにされ、空中に持ち上げられる。腕は一緒に拘束され、杖もその時に落としてしまった。

「ふふっ、可愛い顔してるわね。こういう経験は初めてかしら？」

「な、なんのことですか……？」

少女の顔をした魔物が、私に顔を近づけて来てそう呟く。一体、この魔物は何を言っているの？

「そう、分からないってことは初めてなのね。実に楽しみね、いい顔で泣いてくれるといいんだけど」

「だから何の話ですか!? きゃああああっ!？」

ビリイイイッ!

突然呪詛のローブが引き裂かれ、私は思わず悲鳴を上げた。同時にツタが足にも絡みついてきて、股を引き裂くように両側に広げる。

「な、何をするんですか! やめて下さい!」

ローブがまくり上げられ、呪いの包帯で縛り上げられた股間が露わになる。けれど、その薄布さえもあっさり引き裂かれてしまった。

「や……ああっ、だめ……ですっ、やめて下さいっ」

私の声が予想以上に弱々しくなっていることに、自分自身驚いた。目の前にいる魔物に怯えているのはいつものことだけれど、ここまで萎縮

している自分は初めてだった。

「ふふ、やっぱり、あなたのここはまだ未開の地みたいね。すごく綺麗よ」

「ひやっ、ひうううううううっ!？」

魔物のツタが蛇のように私の股間をまさぐると、全身に電撃を受けたかのような痺れが私を襲った。

「あらあら、いい声で叫ぶのね。じゃあその悲鳴をもっと聞かせてもらおうかしら？」

私の股間の前に、ケインさんを貫いた触手よりも二回りも太い。あれで私を串刺しにするつもりなのね。

「ケインさん、ごめんなさい……私、仇を取ることも出来ませんでした」

「仇? 面白いこと言うのね。あなたって敵を呪うしか能がないんですよ? そんな子に私を傷つけられるわけじゃないじゃない」

少女の顔をした魔物が私の前で下卑た笑いを見せる。人を完全に見下ろした顔に、私の中に黒い感情が沸々と湧き上がってきた。

「あら、あなたでもそんな目が出るのね。でも、睨むだけなら誰でも出来るのよ?」

この魔物は気づいていない、私の唯一の攻撃用呪言に。ケインさんの詩は、ケインさんが息絶えた後も私を守るように効果を及ぼしてくれている。次の一撃を、もし耐えることが出来たなら、反撃のチャンスはあるかもしれない。何より、私にはまだ、傷が足りなかった。こんなかすり傷程度では、相手を呪い殺すことなんて出来ない。

「いいわね、その表情。その顔がどこまでもつのか、試してあげるわ」

ツタが私の股間にあてがわれる。薄く閉じた割れ目に先端が押しつけ

られ、私は死を覚悟した。けれど、息絶えるまでの一瞬が私にとっての最後のチャンス。

「前戯はなしよ。たつぷりと苦しみなさい」

「え……前戯？ なんのこ……がああああああつ!!」

答えを聞く前に、私の身体を衝撃が突き抜けた。全身の骨が激痛に軋み、脳裏で痛みが爆発したような錯覚さえ覚えた。呪法なんて使う暇なんてなかった。ただ、私はあまりの痛みにも、今まで聞いたことのない自分の絶叫を聞いた。

「がああああつ、あぎいいいいいいいっ！ ひっ、ひいいいっ、刺さって、あぐうううううううっ！」

「うふふ、いい悲鳴じゃない。さすが処女ってところね。あなたの中はきつくって温かいわ」

ツタは私の身体を貫通し、お腹の下辺りにまで侵入してきた。胃の中をかき回されているような感覚に、嗚咽と吐き気が同時に襲い掛かる。

「えぐっ、えぐっ、ううっ、いっ、はあっ、はあっ……私、生き……てる？」

不思議だった。

身体を貫かれているのに、これほどの激痛を受けたというのに、出血量は予想以上に少なかった。まるで、最初からそこに穴が開いていたかのように。

「あら、あなた自分の性器のことも知らないの？ 男に犯されて子を孕む為の器官よ。ま、今はあたしが犯してるわけだけど」

「犯されて……子を、孕む？ 私が……化け物の？」

女性器の存在自体は知っていた。子を孕む為に女性が持っている器官だと。けれど、私はその存在を確かめるのが怖くて、一度もそれに触れ

ようと思ったことはなかった。それを、よりもよってこんなことで思い知らされることになるなんて……。

「くっ、ううっ、でもっ……私をすぐに殺さなかったことを後悔させて上げますっ！」

私は女としての喪失感と激痛に苛まれながらも、自らの力を解放していく。この痛みと苦しみは、私の力になる。

「あら、今さら何をしようっていうの？ 悪いけど、私に呪いなんて効かないわよ？」

魔物はさらにツタを私の身体の中に押し込み、激痛をほとばしらせる。それでも私は、歯を食いしばって呪法を唱えた。

「あぐうっ！ ぎっ、いっ、がはっ……わ、私の……痛みよ……敵を……引き裂けええっ！」

「何っ!？」

瞬間、魔物の背後で弾ける音が出て、うねっていたツタの何本かが地面に落ちた。驚愕と苦痛に、少女の顔が歪む。

「私にダメージを与えるなんて、一体あなたは何をしたの？」

「くっ、これがカースメーカー唯一の攻撃用呪言、ペイントレード。私の痛みが、あなたの痛みに変わる。もう一度っ！ 私の痛みよ、敵を引き裂けっ！」

「ぎやあああああつ！」

少女が顔を覆って絶叫を上げる。魔物本体がのたうち回り、ツタが私のお腹の中を食い荒らすように暴れ回った。

「あぐっ、ぐううううっ！ はあっ、はあっ、もしかして、この調子なら……勝てる？」

もしこの魔物を倒すことが出来たなら、ケインさんを生き返らせることも出来る。どん底にあった私の心に、わずかな希望が湧き上がってくる。「なーんてね。ビックリした？ 確かに痛くはあるけど、あたしを殺すには程遠いかな。そんなたくさん撃てるのなら別だけど」

「あっ……んっ、ぐっ、だったら……試してみますか？」

呪言はアルケミスト違い、瞬間的な集中力だけで効果を発揮する。その分、精神力の摩耗も少ない。ペイントレードにしても、それはほとんど変わらない。

「へえ、面白いこというのね。じゃあ試してみるといいわ。その前に、あなたが死ななければいいけど」

「あぐっ、ぐうううっ！ ひはっ、ぎいひいひいっ！ まだ、まだっ、私の痛みよっ、敵を引き裂けっ！ 引き裂けっ！」

お腹の中をかき回されながら、私は必死にペイントレードを放つ。魔物の背後でまたツタが飛び散り、確実にダメージを与えているのが分かる。この魔物も、予想以上にダメージが出ているのを隠しているだけかもしれない。

「なかなかやるじゃない。けれど、あなたの膺はどこまで持つのかしら？ このまま突っ込んだら、子宮まで到達しちゃうわよ？」

「し、子宮っ！？ そ、そんなところにまで突っ込むつもりなんですか！？ それこそ死んでしまい……わあああああああっ！？」

股をさらに押し広げられ、ぱっくりと開いた私の性器にツタがさらにねじ込まれていく。小さな産毛の生えたツタは、私の柔らかい膺壁を擦りながら入ってきて、痛みと共に痺れを引き起こしてくる。

「んっ、ぐううっ、スタン……攻撃っ！？ だめっ、呪言が唱えられなくなるっ……」

「馬鹿ね、それはスタン攻撃じゃないわよ。あなたの身体が犯されて感じ始めるだけよ。こんな太いツタで犯されてるのに、もう感じ始めるの？ 随分と淫乱な冒険者ね」

「わ、私っ、淫乱なんかじゃありませんっ！ 敵を……引き裂けっ！」

私は顔が火照るのをごまかすように呪言を放った。淫乱と言う言葉が、どうしてこんなにも私を落ち着き無くさせるんだらう。痺れにも似た酷い痛みはなおも私を苛み、死へと一歩ずつ引きずり込んでいく。けれど、ケインさんの子守歌が、かろうじて私をつなぎ止めていた。

「ほら、もう膺奥を貫いちゃうわね。さあ、もつと悲鳴を上げなさい？ 痛い方が攻撃力が上がるんでしょ？」

「ひっ、ひぎひいひいひいっ！ いっ、いたあああああっ！」

ぷつり、と私の身体の奥でなにかが切れた音がした。お腹が奇妙な形に膨らみ、激痛に加えて視覚でも私が犯されたことを実感してしまう。

「はっ、はひっ、はひいっ、私っ、犯されてるっ、化け物にっ、犯されて……はひいひいひいっ！」

突如、ツタが私の中から引いていく。再び激しく擦り上げられる膺壁が、また私を痺れさせた。

「あ……ああっ……だめっ、しびれっ……てっ、動けないっ……」

「あらあら、随分気持ちよかったのかしら？ 愛液でたっぷり濡れてるわよ？ そんなに良かったのなら、もつと味合わせてあげる！」

「はっ、はぎひいひいひいっ！ ひっ、あっ、あぎっ、いっ、またっ、抜けてっ……ふあああああっ！ やめっ、もうっ、動かないでっ、あああああああっ！」

私は極太のツタに串刺しにされ、何度も膺の中を擦られる。痛みと痺れが交互に私を襲い、体力を奪う。でも、私はまだ耐えることが出来た。

ケインさんの詩は、それほど強力だった。回復する体力と削られる体力はほとんど変わらない。逆を言えば、ペイントレイドのダメージが安定しているということ。私がこの恥辱に耐え、攻撃を続けられれば……。「うふふ、もうおしまいかしら？ だったら、たつぷりといたぶつて殺してあげるわ」

「まだ、まだあつ！ 私の痛みよ、敵を引き裂けつ！ 切り裂けつ！ 押しつぶせつ！」

「なつ、まだそんな力がつ、ぎつ、がつ、ぎやあああつ！」

効いてる。致命打にはまだ足りないけど、確実に効いてるのは間違いない。少女の顔には深い皺が刻まれて、もう余裕の表情はなかった。

「殺すつ、今すぐ殺してやるつ！」

「ぐつ、あぐうううつ！ 今殺してもつ、私の勝ちねつ……あなたはつ、いたぶり尽くすことを選んだ。なのに、それを曲げるということは……ぐつ、私に負けを認めたということ……引き裂けつ！」

「がぐうううつ！ ぐつ、言ってくれるじゃない。だったら、お前を子宮を犯し尽くし、絶望を味わわせてじっくり殺してやる！」

「やれるものならやってみなさい、私は必ずあなたを呪い殺すつ、がつ、あぐううううつ！ ひつ、あああああああつ！ ひつ、引きさ……がああああつ！」

私が呪言を発しようとする、ツタが子宮を貫いて暴れ回る。腰骨が折れそうなくらい、股が裂けそうな位の痛みが走り、私は泣き叫んでしまふ。それでも一瞬の隙についてペイントレイドを放ち、確実に化け物にダメージを与えていく。

「あつ、あぐつ、んつ、あふうつ……痺れなんか……負けないつ、私の痛みよつ、敵とつ、はぐつ……切り裂けつ！」

さつきよりも激しい爆発音と共に、魔物幹が弾け飛ぶ。ぐらついた魔物は、私を取り落としそうになった。

「はあつ、はあつ……なかなかやるじゃない。正直、甘く見てたわ」

「はあつ、はあつ、後悔しても……もう、遅いですつ、これが最後つ、私の痛みよつ、敵を滅ぼせええつ！」

私は激痛に悶えるお腹に力を込め、最後の呪言を放った。瞳をえぐられる痛みがさらに私の体力を奪い、さらなるダメージが変わる。そして、再び幹を爆発させた魔物は、この一撃で倒れた。

……はずだった。

「な……どう……して？ まだ、生きているの？」

今日2度目の言葉だった。魔物の顔が凶悪な笑みに変わり、私の前に近づいてくる。

「さっきので打ち止めかしら？ そう。そうよね？ わざわざ自分の身を痛めつけて放った一撃だものね。でも、私はこの通り、死んでいないわよ？」

「そんな……そんなはずなのに……！」

「ふふ……あははつ、アヒヤヒヤヒヤ！ 馬鹿ね、とんだお馬鹿さんね！ バードの子守歌を受けて、ダメージを受けつつ瀕死を回避していたつもりなんですよけど、それがそもそも間違いだったのよ？」

何を……言っているの？ ケインさんの子守歌は、間違いなく私を致死から救ってくれていた。だからこそ、精神力が尽きるまで生きていられたはずなのに。

「その子守歌が、あなたが感じていた痛みよりも遥かに体力を回復させていたとしたら？」

魔物の唇から、きらきらと粉が舞い散るのが見えた。その瞬間、私の

「けはっ、いやっ、いやああああああっ！」

「ごぶっ、ごぶっ、ごぼおおおっ！」

「ああああああっ！ わあああああああっ！」

「ごぼっ、ごぶっ、ぶしやあああああっ！」

大量に吐き出された液体が、一気に子宮の中を埋め尽くした。お腹が内側から押し出される苦痛に悶えても、射精は止まない。膣道を押し広げながら逆流した精液が、私の恥ずかしいところから一気に飛び散っていく。それはお尻も変わらない。直腸を満たし、腰を熱く焼きながら、私のお尻から白い液体が飛び散っていく。

「あっ、あぎっ、がああああああっ！ やあっ、いやああああああああっ！」

全身が壊れたバネ仕掛けのオモチャのように暴れる。けれど、突き刺さった2本のツタと、胴体に巻き付いたツタが私から自由を奪う。不思議な昂揚感と熱さが何度も行き来して、自分の身体が何か別の物に変えられたような気がした。

「あ……がはっ……う……うあ……あひ……いつ……」

「ふふっ、どうやら豪快にイッたみたいね。どう、気持ちよかった？」

「魔物に犯されて絶頂した気分は？」

「はあ……はあっ……イッた……？ 絶頂？」

私は意味の分からない言葉をオウム返しに呟く。きっと、さっきの昂揚感のことを言ってるんだろう。けれど、それは疲弊した私の精神には恐怖しか与えなかった。

「気持ち……よく、ないっ、怖いっ……。お、お願いっ……死な……せて……」

「あらあら、気持ち良くなかったの？ それは残念ね。じゃあ気持ちよ

くなるまで、私が犯し続けてあげるわ」

「そん……なっ、もういや……許して、お願いっ、殺して……」

「だーめ、その為に子守歌を聞かせたって言ったでしょ？ あなたは何度も激痛に苦しみ、絶頂に喘ぎながら、ゆっくりと死んでいくのよ？ 次の冒険者が、あの扉を叩くまで」

Q u e s t —— 華は無慈悲な森の女王 ——

……PT全滅。





一人じゃ危険じゃないか?

ん? どこ行くんだ?



えっと... まだここで休憩してるよね?

あの... わたし ちょっと...

— 休憩中



そうか?

だ、大丈夫! ひとりでもいいからっ

でも心配だし ついていこうか?



ん? よく聞こえないんだけど...



もうっ!

おしっこ行くから ついてこないで っって言ってるのっ



心配してくれるのはうれしいけどそんな事よりパーティに女の子一人にしないよう

Aaアア



やあああんな事大きな声で... 恥ずかしいっ



うう... やっぱり一人じゃなんか心細いよう



ちょっと離れすぎちゃったかもしれないけど恥ずかしいし...

この辺りなら大丈夫かな... 行き止まりになってるし...



ううでももどりにくいなあ... あんなこと言っちゃったし



なんでアルケミさんはずしたりするのよっ別にそのままでもいいじゃないっ

あ... アーマーはずさないとな... 脱げない...



だ、だれ？
きやああ

!?

ケム

メディックは頭部を封じられた
メディックは腕を封じられた

30

な、なんか
いつものより
強そうなの
クモがっ!?

動きも封じられて
わたしひょっとして
大ピンチ?

やっクモツ
こんな所につ



あ、いや...
こっちはないでっ...

あっちに
いってってば...



い、いやあああ
わたしクモ
嫌いなのにっ

や、クモッ
クモなんかにつ...



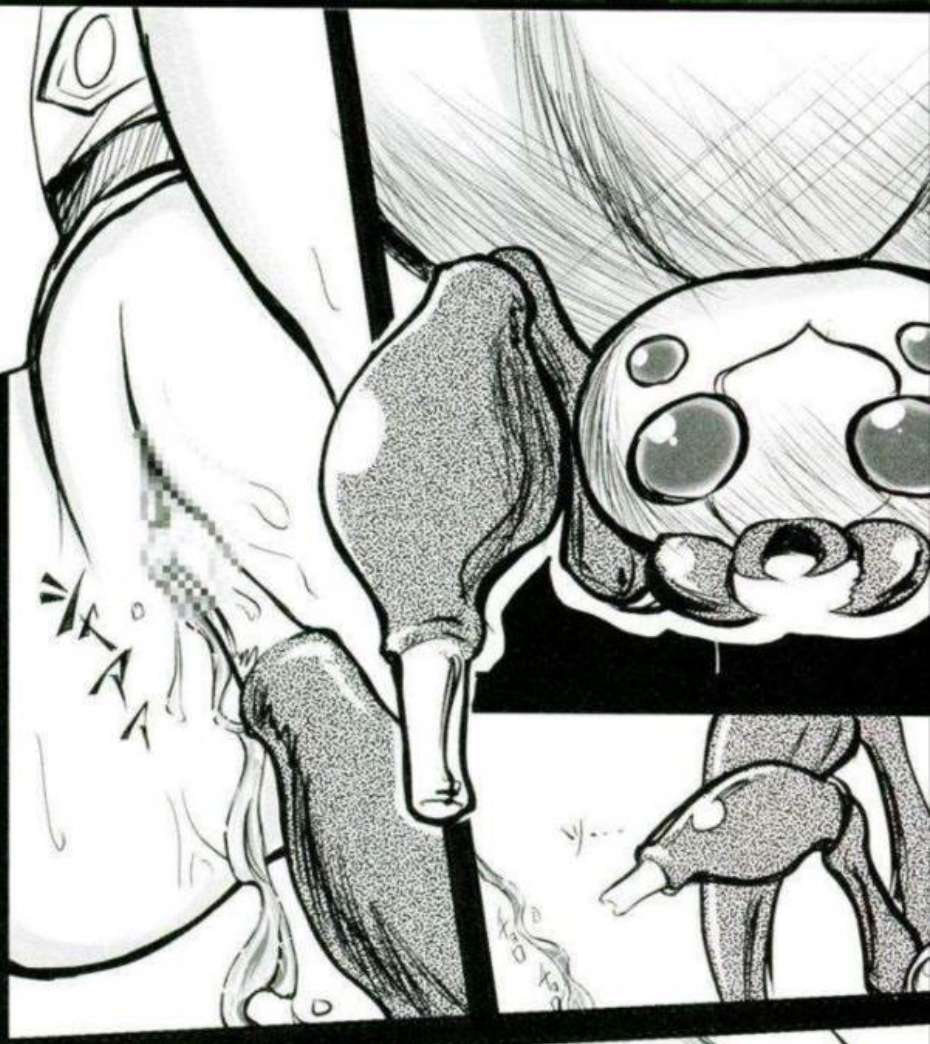
あ...やだ
わたし...



クモなんかの
目の前で...おしっこ
しちゃってる...



やあ・
そんなところ・
おしっこでてるのに
さわらない・で・



や、やだやだ
なんでそんな
ところばかり…





え、いやっ
まさか本当に・・・
な、なんでなんでっ

やあ、
それだけはっ
いやあああ

はじめてなのにっ

33



やあああ
だ、誰か
たすけてっ



ツズケル巨知識下
クモは触肢に精液をためて
それを挿入するらしいわ。

やっ！
いれない...でっ
えんたっ

ダメエ

やい、
やあ、
あ

あか...
あかん...

ひひ、
ひあああ

や、やあ・
クモの・が・

クモのせーえき
入れられちゃってる
・
入って来ちゃって
いるよう



ツスクル豆知識
②

触肢は左右にあって
それを交互に挿入
するらしいわ。

場合によっては
数時間もそれを
繰り返す事も
あるらしいわ。



え、それって
もしかして・



22:14 下田開始。

遅いから心配に
なって探しに
来てみたら・

なんかトンでも
ない事に・

被害者
一名追加。

ショタども顔面ないらしい

俗に「世界樹」と呼ばれる迷宮を探索する冒険者たちにとって、嬌声を迷宮内部で聞くことは、そう珍しいことではなかった。

何故、と問われても、そういうものだから、としか答えようがない。冒険者たちのパーティには、恋人同士で組んでいゝるものたちも少なくないし、迷宮内はそもそも人通りが多くなく、その種の行為に及ぶには「そこそこ適度な」場所だった。まあ、娯楽が皆無の、閉鎖された迷宮という空間を何日も彷徨ってれば、自然にそういう雰囲気になってしまうだろう。

しかし、残念ながらそこまで幸せな連中でもないものたちの声も聞こえてくる。

迷宮を徘徊するモンスターたちには、その種の行為で生殖活動を行う厄介な種類もいる。種床にされてしまえば命は助かるかもしれないが、死ぬよりも辛い一生が待っている。

そして、冒険者にとって、実は注意すべきものはもうひとつあった。

人間。同じ「冒険者」という、もうひとつのモンスターたち。

迷宮を支配する「弱肉強食」の概念は、モンスターにも冒険者にも、等しく適用されるのだった。

「オラ、早く歩けよ！」

「イタっ！ そんなに強く、ひっぱらないでっ！」

「そんなこと言える立場かよ。オラ来い！」

「ううっ」

革製の赤い首輪に付けられた鎖に引っ張られながら、サクラは情けないうめき声を上げた。彼女の顔には苦悶と恥辱が浮かんでいた。

犬のように首輪を付けられたサクラは、彼女の職業であるブシドーの伝統的な戦闘衣装——赤い袴に白い胴着という井出達だったが、それ以外に彼女がブシドーであることを示すものはない。

防衛が不得意な彼女たちを守る鎧も、そしてともに命を預ける仲である「鞘」と「刀」も、身に付けられていない。胸にきつく巻かれているべき「さらし」もなく、胴着のスキマから豊富な胸元がはだけている。その他には……彼女のトレードマークたる赤いリボンが、長い黒髪をゆったポニーテールの根元で揺れている程度だ。

サクラの後ろでは、彼女の妹であり、同じブシドーの道を選んだミズナが、同様の格好で続いている。彼女もまた、赤い袴と白い胴着以外、剥ぎ取られている。ショートカットの髪に隠れた左耳のあたりにあった手毬のような紙細工もなくなっている。

二人は、五人の冒険者たちに、迷宮の内部で引き回されていた。五人は全員男だった。想像力が働くものならば、この

事実だけで、彼女たちがどんな災厄に見舞われているかを想像できるだろう。

「オラ、さっさと歩けよ。今日のイベント会場が待っているんだよ」

五人の男の一人（サクラは名前も思い出したくなかった）がそういって、彼女につながれた鎖をさらに強く引く。

サクラは憎悪の視線を男に注ぎながらも付いていくほかない。両手は後ろで縛られていたし、たとえ両手が自由になつたとしても、刀のない彼女たちは弱い女でしかない。あれこれと武装した男たちに勝つことは出来ない。

「お姉ちゃん……」

後ろのミズナが、今にも泣き崩れそうな虚ろな表情で、サクラを見つめた。

「大丈夫、大丈夫よ」

サクラはいつものように、怖がりな妹に力強く答えた。

「姉さんが、守ってあげるから」

「またそのセリフかよ。もう妹も諦めてるぜ、きつと？」

ミズナを引いていた男が、下卑た微笑を浮かべながら、サクラに言う。

「なんてったって、その言葉を聞いたそのすぐあとに、ミズナちゃんは『女』にされちまったわけなんだからな。もう信用なんて出来ないよな。なあ、ミズナちゃん」

そういって男はミズナにつながれた鎖を引き、ミズナはか細い悲鳴を上げる。一方、サクラは反論も出来ず、ただ口を食いしぼる。少なくとも、男のセリフの前半部分は、実際に

数日前に起こった出来事だった。

——サクラとミズナ、ともにブシドーを志した姉妹が、迷宮を探索している最中、迷宮の長い探索に疲れ、女に飢えた5人の男たちに襲われたのは、一週間前のことだった。

彼女たちにとって最大の不幸は、5人の男たちが、どうやら、いまだ前人未到であったはずの第四階層にまでたどり着いた冒険者だったことだった。

第一階層をやつと抜けることが出来た彼女たちとの力は懸絶していた。事実、妹を守るべく戦いを挑んだサクラは、簡単に身体を束縛された。

二人が五人に輪姦されたのはその夜のことだった。二人は悲鳴を上げながら破瓜のイタミと肉棒の熱さを味わった。

弱肉強食がルールである「世界樹」と「街」の中では、隙を見せた彼女たちが悪い、ということになる（少なくとも、

世界樹にかかわる人々の価値観では）。

それから一週間、二人はこの男だけのパーティーに、毎日毎晩のようにまわされた。奴隷のように。

おかげで、すでに姉妹は、セックスの快楽——肉の味を覚えはじめていた。

気丈なサクラはそれでも男たちに抵抗をする気力を失っていなかったが、妹のミズナは残念ながらそこまで強くなかった。

ミズナは現実を受け入れ、快楽におぼれつつあったからだ。もちろん、サクラにしてみれば受け入れがたい話でもあり、そして己を憎むに十分な話でもあった。ブシドーであるのに

もかわらず、彼女は男たちに負かされたのだ。

この日、男たちは、そんな相克した感情と身体を持つ姉妹を、迷宮に導いていた。

武器を奪われ、いまや誇りすらも失いかけて二人は、イカ臭い香りがしみこんだ、しかし思い出深い赤い袴を引きずらせながら、首輪を引かれるしかなかった。

彼女たちが歩いているのは、第二階層のどこか。無数の不気味な植物と動物に支配された、あの場所だ。どこからか、噂に聞く飛龍の雄叫びも聞こえている。

「ここだな……オラッ！」

「やつ！」

姉妹は第二階層のとある狭い区画で男たちに背中を押され、倒れこんだ。

「何をするつもり……！」

サクラがきつと睨みつけながら答えた。ミズナはがくがくと震えながら、寄り添うように姉に近づく。

「なについて、決まっているじゃねえか、ねえ！」

五人の冒険者の一人が、リーダー格の男に尋ねる。リーダー格の男は、にたにやした顔で言う。

「ここは第二階層の、植物系のモンスターどもがよく集まる場所だ。俺たちにとつちや雑魚だが、おまえらの腕だと体の良いエサだ。で、今の季節は、そういうやつらがずいぶんと『盛る』時期でもあるんだな。メスの匂いをぶんぶんさせて

いる今のお前らは、いい寝床になるってわけ！」

「ま、まさか……！」

サクラは真っ青になりながら叫んだ。彼女たちにしても、植物系のモンスターが、「どうやって」生殖をするかは聞いたことがある。

と、周囲の藪から、がさこそと、何か多数の生物が轟く音が聞こえてきた。その意味を理解したミズナが、ひっ！と悲鳴を上げる。

リーダー格の言ったとおりだった。「人喰い草」や「かみつき草」、さらには「危険な花びら」「邪悪な花びら」といった植物系のモンスターが、二人を目ざとく見つけ、接近しつつあった。

彼女たちを取り囲むように接近しつつあるモンスターたちは、どれも「オス」らしく、「生殖器」と思しき、男性のペニスに似た触手を何本も広げている。

「こ、こんなことに、何の意味があるのよ！」

サクラは叫んだ。しかし、冒険者たちの返答は、単純明快で冷酷だった。

「何の意味って……そりやあ、おまえたちがそいつらにまわされるのを見たいから、それだけさ。たまにはこういう遊びもいだろう？」

「そんな、遊びでなんて……！」

人だけならばまだしも、モンスターたちのなぶりものにされ、見世物にされる……女としても、人間としても、ぞっとするほどの恐怖だった。ブシドーとしての誇りすらも失いか

ねない。サクラは後ずさりして、許しを請いたくなる。

が、彼女のとらりには、守るべき妹のミズナがいた。肩を震わせ、サクラに寄り添ってきている。

サクラはぐつと唇を噛み締め、言った。

「やめて！　お願い、あいつらの相手は私がするわ、だから、

ミズナは、ミズナだけは許してあげて！」

「お姉ちゃん……！」

ミズナが切羽詰った顔でサクラを見る。しかしサクラはあえて妹を無視する。そんな余裕はない。

「いまさら、そんなことを了解すると思っているのか？」

リーダー格の男が、口をゆがめて答える。

「けどまあ、そうだな、ナズナちゃんに、俺たちの相手をさせるなら、今回のところは、モンスターたちの相手は許してやってもいいけどな。どうだ？」

「なっ……!!」

「ダメならダメでいんだぜ？　植物の怪物相手に、仲良く姉妹丼だ。安心しろ、疲れてもウチのメディックが回復する。

近くに泉もあるからな。一週間くらい、二人で続けてもらってもいい。怪物たちは山ほどいるから、俺たちみたいに飽きないぜ？」

サクラは、あまりの言葉に目を硬く瞑る。

「どっちか早く決めろ！　妹に俺たちの相手をさせるのか、させないのか！　おまえが自分の口で言え！」

サクラは唇を噛んだ。妹の顔など見ることが出来ない。男たちが彼女に突きつけた選択した明快だった。妹が人間に輪

姦されるかモンスターに輪姦されるかどちらかを選べ。

もちろん、答えは決まっていた。どちらにしても最悪だったが。

「ごめんね、ナズナ、ごめんねっ！」

「妹を……犯してください」

「お姉ちゃん……」

なんともいえない表情でナズナは姉を見上げた。しかし、それでもサクラは妹を見なかった。見てしまえば……罪悪感と自己嫌悪で自殺したくなるに決まっていた。

「おう、話がはやいぜ……というわけで、ナズナちゃんはこっちだ」

「やあっ」

そういつてナズナは男たちに手を引かれていく。サクラはそれを見つめるしかない。ただ一点、自分の妹が、男の味に目覚め始めている……という懸念だけが脳裏に残るが、今ではどうしようもない。彼女に出来ることは、自分の妹がブシドーとしての誇りをいつまでも捨てないことを祈るばかりだった。

と、その間にもモンスターたちは、サクラの周囲を取り囲んでいた。

数は軽く二〇匹以上、鎌首を上げる触手は一〇〇を超え、視界を奪わんほどだ。植物の青臭さと、精液そのものイカ臭さが混じった匂いが備考を突き刺す。むせかえりたくなるような気分になる。しかし、少なくとも後者はすでに慣れたにおいだった。

サクラは自分の股間が濡れていることに気付いていた。すでに彼女の身体は「そういう風」になっていたのだった。恥ずかしさと情けなさで泣きそうになる。

そんな彼女に、多数の触手は何の遠慮もなく絡み付いてきた。

「っっ！」

嫌悪感をあらわにしながら、サクラは身をこわばらした。

しかし、抵抗は出来ない。抵抗すれば、妹がなにをされるか分からない。

と、袴の中に入り込んだ触手の一本が、後ろのほうから股間に入り込み、彼女の陰部をさすった。

「んはあ！」

一瞬だけこすれただけだというのに、彼女は熱の竦った声を上げていた。その声にサクラの感度の理解したのか、触手は続けて陰茎で陰部をさすり続ける。

「はっ、こ、こすら……ないでえっ！」

それと同時に、胸元にも何本もの触手が入り込み、彼女の白い胸着をはだけさせ、胸元をあらわにする。

かたちのよい胸があらわになり、ぷるりと揺れる。それにくらいつくように、触手たちは胸にからみつき、ほんのりと桜色に染まった乳首をいじり始める。

「はっ、いやっ、あああう！」

どうやら、モンスターたちも、「前戯」という行為を知っているらしい。いや、これも生殖を上手く行うための、進化の末に体得した習性なのか。

(モンスターなんかに、モンスターなんかに気持ちよくさせられるなんて！)

サクラはそう思い、歯を食いしばって愛撫の快感に耐えようとする。

ここ一週間、男たちに輪姦されていたからか、彼女の胸は以前よりも大きくなりつつあった。もちろん、嬉しくもなんともない。自分の胸は、男たちやモンスターにもてあそばれるためのものではない。

一方、ほかの触手たちは、新たな責めを始めていた。

「ひっ！ んはあ！ い、いじらないでえっ！」

陰茎でこするだけではつまらなくなったのか、モンスターたちは細い触手で、サクラの陰部をいじり始めていた。

すでに充血しつつあるクレヴァスの中心に触手を何本も這わせ、その奥の花弁に先端をこすり付ける。ぷっくりとふくらんだクリストスにも絡みつき、さらにその下の蜜壺にも何本か滑り込ませる。

すでに、愛液でぬらっていた彼女のそこは、難なく細い触手を飲み込んだ。

「いやっ！ ひっ、はあっ！」

サクラは両足をばたつかせてそれを防ごうとする。しかし、何十本の触手に身体を奪われていては、どうすることもできない。

か細い触手の群れは、どれもミリ単位の毛で覆われており、それが陰部にこすれるだけで、小さな電流が走るようにサクラに快感を与えていく。

触手の群れは、サクラの両足のひざを上げさせて、胸元に近づかせた。いつのまにか赤い袴も右の太もものあたいまでずりおろされ、サクラの陰部は、彼女の目から見ても丸見えとなってしまう。

「いやっ、そんな、見せないで……!」

もちろん、そんな声を理解するようなモンスターたちではない。胸に、陰部にと容赦なく触手を群がらせていく。

荒く湿った息を吐き出しながらも、そして自分が快樂におぼれつつあることを自覚しながらも、それでもサクラは守るべき妹のことを忘れなかった。ちらりと妹がいる方向に視線を向ける。

「んはあ! うぶ、うくううううう!」

「そうそう、ミズナちゃんも上手くなったなア」

「うは、そんな……うぶっ!」

すでにミズナは、二人の男に組み敷かれていた。

一人は騎乗位のかたちで犯し、もう一人はミズナの口にフエラチオを強制している。もう、二人にとっては慣れた体位での輪姦だ。

サクラは見るに耐えない、という表情を浮かべて目をそらす。しかし、これしか取るべき道はない、と思っている。妹がモンスターに（まさに自分のように）輪姦されるなど、悪夢そのものだ。

しかし、サクラの身体も正直に反応してしまっている。

今も、もみくちやにされる胸と、好き放題にいじられる陰部の快感に、荒い息だけでなく、気付かないうちに喘ぎ声さ

えだしていた。

「はっ、あつ、いや、んく、あくああ! んんっ!」

「そうそう、いい感じ!」

「っっ!」

サクラは彼女が悶える様子を見ていた男たちの声を聞き、思わずひざを締めようとした。

しかし、触手はそれを許さない。むしろ、さらに力を込め、陰部を大気にふれさせようとする。

全身をなぶる触手の愛撫によつて感覚と意識が分断され、全てが甘美な痺れに流されていく。力を込めることしか出来ない。

そんな彼女に向けて、一匹のかみつき草が身を乗り出してきた。このモンスターもまた、多数の生殖器を持ち上げながら、サクラを抱きかかえるように引き寄せた。

男性の生殖器そのものの触手の群れ。どれも、ぬらぬらと我慢汁を滴らせている。

「ひいっ! や、やめっ!」

「そろそろ本番ってことだよ」

男の一人が、にたにたと笑い声をあげながら答える。

「安心しろ。こどもを孕むかどうかは神様にしかわかりやしねえ。最悪、死ぬことはないから安心しな」

そういつて、残酷に突き放す。

「まあ、このあと何匹も控えているからな。どれかはヒットしちまうかもしれないが」

「ひいっ! そんなっっ! いやあっ!」

だが、サクラは現実を受け入れるしかなかった。何しろ、妹の身が——すでに身も心もぼろぼろとはいえ——かかっているのだ。

そんな事情など知ったことではないように、噛み付き草は多数の生殖器——そのひとつをサクラのクレヴァスに押し付けた。

すでに愛撫によってじっとり濡れたそこに、亀頭の部分は難なく滑り込んだ。

「んあああつ！」

サクラの腰に、甘美な圧迫感が伝播する。すでにこの一週間で、何回も男を受け入れている場所だ。感触こそ男性よりもざらついているが、それは確かに彼女が何度も味わっている生殖器そのものだった。

そのまま、ゆっくりと、具合を確かめるように、生殖器は膣内へともぐりこんでいく。

「ふあ、や、め、つああああ……！」

声を上げてサクラは咽ぶ。自分の陰部が、人ではないモンスターの種床にされようとしている……そのことにどうしようもない絶望感を感じながら、自分の身体が何の痛みもなくそれを受け入れてしまったことにも、また違う絶望感を抱く。敵と戦い、勝利することに特化した己の役職、ブシドーとしての誇りが音を立てて軋む。自分はすでにブシドーではなく、ただの女になっている。そんな苦すぎる思いが頭をよぎる。

その光景を、男たちはイチモツをしごきながら、にたにた

と楽しげに見ている。サクラは快楽の脳を汚染されるような気分になりながら、悔しげに表情をゆがめた。

しかし、その思考も、生殖器がそれが当然であるかのようを開始したピストンに押し流される。

「いやあつ！ んあ、はっ、んひいつつ！」

全身を触手に縛られているサクラは、そのピストン運動を受け入れるしかない。

ピストン運動にあわせるように、身体が上下に揺さぶられる。そのたびに膣が生殖器にこすられ、いいようもないうずきがサクラを襲う。

「あああつ、いや、いや、あああつ！」

サクラは叫びながらも、自分が腰を降り始めているのに気付く。すでに彼女は、男たちに組み敷かれているときも腰を振る女になっていた。その事實は、たとえ犯しているのがモンスターであっても変わりはない。

「いやつ！ こし、とまら……はうつつつ！」

まるで糸人形のように、サクラはピストンにあわせて身体を動かしてしまう。

ふとももにひつかかった赤い袴がはらはらとゆれ、胸元のふくらみがたふたと上下する。乳首の先は充血しピンと逆立ち、その逆立ちを別の生殖器が執拗にこすりつける。犯されている陰部にも、多数の細い触手がまとわりつき、ぬめりのあるところ全てをいじくる。

気の遠くなりそうな快感が全身を覆い、現実ではないどこかに意識が引き剥がされそうになる。もはや妹がどうなっ

いるか、自分がどうなっているかわからなくなってきた。
る。

自分と、モンスターの絶頂が近づきつつあることを除いて、
絶頂が迫るにすれ、徐々に亀頭が肥大化するのは、人もモン
スターも同じらしかった。

「ふあっ！ いやあ、あ、く、こ、こんなので、イきたく
なんて、な……んはあ！ うむっ！」

もはや喘ぎ声を出すだけの器官となっていた口に、別の触
手が滑り込み、ディーブスロートを要求する。

すでに慣れてしまっていた感触に、サクラは無意識のうち
に（自動的に）舌を絡ませてしまう。もちろん、その間も陰
部への責めは頂点に達しようとしている。

「んぐ、あう、っはう、んぶ、んぐ、ぶはああっ！ あっ、
あっ、あっ、いや、くる、いやあああ！」

サクラがそう叫んだ瞬間、モンスターは甲高い雄叫びを上
げた。それと同時に、蹂躪されていた膣で射精が行われる。
樹液のようなねばっこさと、熱湯のような熱さをともなった
液体がGスポットに直撃する。

「あついつ、つあああ！」

その瞬間、サクラは背筋に突き抜けるような快感を覚え、
背筋を反るような姿勢で気をやってしまう。頭の中が真っ白
になる。

サヤカを犯しかかっていたモンスターの動きに同調して、
他のモンスターもサクラに触手を向け、一斉に白濁液をぶち
まける。一瞬にして、サクラの体中は精液まみれになる。赤

袴も、白い胴着も、長い黒髪も、どろどろの何かに変貌する。

「あつ、はつ、うううっ……つあああ！」

ようやくのことで満足したのか、サクラを犯していたモン
スターは身を引き、同時に生殖器を一気に引き抜いた。

それと同時に、こぶりと白濁液が糸を引きながら膣部か
ら噴き出してくる。量は人間の二倍ほど。しかし、5人をい
っぺんに相手にすることさえ普通だったこの一週間と比べれ
ば、まだマシンなのかもしれない。もちろん、サクラにと
っては残酷すぎる感触でもある。

「はあつ、はあつ、はあつ！」

いまだ多数の触手に巻きつかれたままとはいえ、サクラは
ようやく一息つくことが出来た。再び思考が活性化し、自分
がなにをされたのか、いやおうながらも理解する。いろいろ
な意味で、最悪な気分だった。

「どうだ、モンスターにやられた気分は」

リーダー格の男が近寄り、サクラの頸を腕であげる。

「うっ……最悪、よ」

サクラは健気に答える。

「けど、あんたらにやられるよりかはマシ、かもね……」

「うじゃやねえかメス犬のくせして。んじや、そろそろつぎ
の段階に入るか……おい！」

リーダー格の男がそう叫ぶと、二人の人影が触手をかきわ
けて、サクラに近づいてきた。その人影が誰であるか認識し
た瞬間、サクラは悲鳴を上げる。

「そんな……ミズナ！」

男が、再びミズナの鎖を引いてきたのだった。もちろん、サクラの陰部からは、白濁液がながれっぱなしだ。

だが、サクラにしてみれば、そんなことを気にしている場合ではなかった。彼女にしても、男たちがなにをたくらんでいるかは明白だったからだ。

「な……そんな！ 約束と違うじゃない！ ミズナは！ ミズナにはこんなことさせないって！」

「違うぜ姉ちゃん。ほら、ミズナちゃん、いってみな」

その言葉に促され、ミズナは躊躇いがちに、しかしはつきりと口にする。

「お姉さま……私も、ませて、くれないかな」

「!! そんな。なにを！」

サクラは唾然とするほかなかった。しかし、その驚きも、ミズナの表情を見て諦観に換わる。

ミズナの表情は、もはやこれまでのミズナの顔ではなかった。完全に性の愉悅に支配された顔だ。つまるところ、それは……男の味に完全に目覚めてしまったということ。

「だそうだよ。けっけっけ」

「そんな……！」

サクラは泣き叫ぶように表情をゆがめた。これまで、自分がなにをされてきたか、その意味さえもこの瞬間に雲散したのだ。もちろん、これからおこることも、予想できている。

そんな姉妹の痴態を、男たちは口をゆがめて見つめている。これが……これが本当に見たかったとでもいうように。

そして触手たちも、再びサクラを、そしてミズナに絡みつ

き始める。モンスターたちは、おそらく全てが満足するまで、この生殖のチャンスを逃すことはないだろう。

「いや、目を覚まして、そんな、いやあ！」

「お姉ちゃん……いっしょに……！」

「いやあああつ！」

……迷宮に響き渡る嬌声は、この日から3日間ほどやまなかつたという。



植物のツルと
ねばつく液体は
こんだけ……と



さあ
お次は……

45



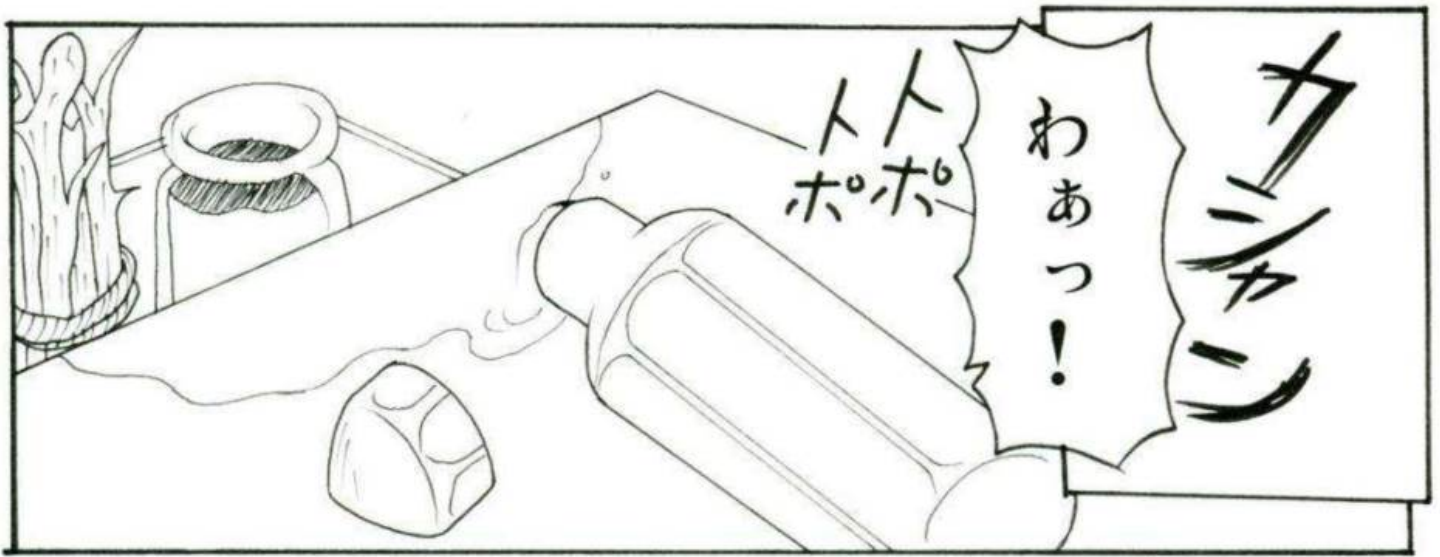
んっ？

ミリカ商店

繁盛記

～商品ができるまで～

龍樹悠太





ま、まさか
ネクターを
浴びて...?



ジグザグ



きゃあー！

わんわん

キョーッ



やあっ!?



そんな
いきなりっ!?



ふわああっ!!

クニクニ



な、何これえ...

ボクのお腹
いっぱい熱くて...



凄くイイ!





ああん♪



だ、だめえ



んん



END

○あとかき○

ゲストの皆さんには「目次に載せるのでタイトルお願いします」と言っというて、いざ目次書く段階になるまで自分の漫画にタイトルつけるのまるっと忘れて題字入れるスペースも考える時間もねえ俺惨状！ orz

……それはさておき如何でしたでしょうか。

結構突発的な思いつきから作った本ですが、改めて参加して下さったゲストの皆様、お忙しい中本当にありがとうございました。

いやまさかこんなボリュームになろうとは。なんか普通にウチの本じゃないみたいだよ！？（おい

それでは、世界樹ファンのあなたにも、異種姦スキーなあなたにも

今年の夏は幸多からん事を祈って。

私は華麗に夏コミ落選しましたので、また別のイベントでお会いしましょー。

2007/06/17 いっし たいら

○奥付○

発行日：2007/06/17

発行：(有)化野水産

e-Mail：isshi@f7.dion.ne.jp

URL：<http://www15t.sakura.ne.jp/~isshi/>

印刷：緑陽社様

提供

(有)化野水産

ユウ・アダシノスイサン

十八歳未満の閲覧を禁じます